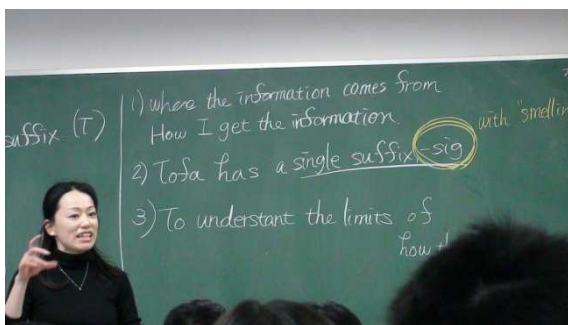


II. 本校での受け入れ

本校では金沢大学からの要請を受け、2月6日から9日までの4日間、台湾師範大生徒5人を受け入れ、それぞれに授業を1時間ずつ担当してもらうことになった。

このプログラム自体は、大学のプログラムであり、その実習先を本校が担うことになったのだが、プログラムに参加している学生たちはもちろん、当校の生徒たちにもかなりよい刺激になったように思う。というのは、台湾と日本とは、英語に関して似た境遇にすることが大きい。つまり、英語は使えた方がよく、学校でも必修科目になってはいるが、英語を使えないと将来絶対困るというわけではない、通常の会話は台湾語で行われる、という面で日本とよく似ているということである。しかし、当校の生徒たちは、台湾人学生5人の優れた英語力にかなり驚いたことと思う。確かに、彼らは台湾師範大学の英語科の中でも、優れた学生たちではあったが、彼らはいわゆる英語圏で英語を学んだことがないにも関わらず（そのうち2人は、1ヶ月程度のイギリスでの語学留学はしていたが）、流暢な英語で授業を1時間 **All English** で行ったのである。

また英語力だけにとどまらず、当校の生徒たちにとっても、台湾人学生との交流を通して、文化交流ができたこともよかった点であろう。



授業見学（1日目）

2C（英語Ⅱ）担当：荒納

授業準備（2日目）

当校教諭 荒納 郁美
台湾師範大学学生 Sandra



授業実践（3日目：1限目）

2A（英語Ⅱ）
担当者 台湾師範大学学生 Sandra





授業実践 (3日目: 2限目)
2C (英語II)
担当者 台湾師範大学学生 Lisa

授業実践 (3日目: 4限目)
1C (英語I)
担当者: 台湾師範大学学生: Melody



授業実践 (3日目: 5限目)
1B (英語I)
担当者: 台湾師範大学学生: Anita

授業実践 (3日目: 6限目)
2B (英語II)
担当者: 台湾師範大学学生: Tina



Taiwan Hour (台湾に関するプレゼンテーション：4日目1～3限目)

本校の総合の時間は台湾現地学習とリンクしており、生徒たちは自分たちでテーマを決め、調べ学習をし、現地学習中に台湾での取材を通し、最終的に冊子にまとめる。そのような中、現地学習約1ヶ月前に台湾からの学生を迎えることとなり、ぜひ彼女たちに台湾に関するプレゼンテーションをしてもらおう、ということになった。

プレゼンテーションはAll Englishで行われたものの、スクリーンもあり、題材も現地の食事・観光名所等であったため、生徒たちは自分たちが訪れる地について興味津々聞いていたように思う。



1. 授業の内容に関して

5人の学生に、英語Ⅰでは教科書最後のリーディング「葉っぱのフレディー」の一場面、英語Ⅱでは教科書Lesson10の最後のパートPart 5を扱ってもらった。

まず打ち合わせの段階で気付いたことは、彼らが日本の英語教育に対して何も知らないことであった。その前に授業見学を設けてはあったが、1時間授業を見て全てを理解してもらう、ということは到底無理な話であり、これは今後このプログラムを進めていく上でも、改良すべき点であった。そんな中でも、台湾人学生たちはすばらしい授業を展開してくれた。その中で、日本と台湾の英語教育の違いで特に気になった3点について述べたいと思う。

① 単語の扱い方

打ち合わせの段階で、本校教員側から絶対に授業中に扱ってほしいこととして、単語の確認をお願いしてあった。そんな中、日本の英語教育と台湾の英語教育における『単語』の扱い方の違いが顕著に出てきた。日本では、多くの先生方が予習の段階で単語を調べてくることを推奨したり、もしくは予習プリントを作成し、生徒にやって

くるように指示をする。また、調べる媒体は辞書を用いてである。そして、授業の中で、先生によっては予習の有無を確認したり、生徒を呼名して意味を答えさせたり、発音を先生のあとにリピートをかけることで確認したりする。(私本人も、予習プリントを作成し、予習として単語を調べ、一読して、また家でCDを聞くように指示している。授業では、発音のみリピートの形で確認を行う。資料①)ところが、台湾人学生たちに、予習プリントをどうするかを確認を取ったところ、(というのも、準備の日が授業の前日だったため、すぐに印刷して生徒の下校までに渡さなければいけない状態であったため早めに確認をとった。)皆が口をそろえて必要ありません、と答え、むしろ生徒たちには辞書で単語の意味を調べてこないように、という指示を出してほしい、という返答を得た。それでは、どうやって単語の確認を行うのかというと、基本的に5人とも次のような形をとっていた。

(1) ゲーム：新出単語等を用いて、クロスワードや、ビンゴ等をおこなう。

(資料②)

(2) 単語の発音を確認する。(リピート)

(3) 単語の意味を簡潔に英語で説明する。その際には、同義語やボディーランゲージも用いる。

いつもと違う活動で生徒がどれだけ把握できたかは少し疑問が残るが、(3)などは、単語量を増やす面でとても有効であると思う。

② アクティビティの多さ (授業中の写真参照 P4)

① (1)でも触れたが、基本的に生徒がアクティブに発言することが台湾の英語の授業では求められるようである。そのため、授業自体も初めからグループで集まり、またグループで発言をすることによってポイントを稼いでいく形を皆が取った。そのため単語以外においても、様々な形で発話を促す活動を取り入れ、ワイワイと授業が進んでいくようであった。

③ 文章内容理解の軽視

②にも関わってくるのであるが、本文の内容を扱う際も、単語をおさえてさらっと読んで終わり、といった感じであった。日本のように文章の内容にまで目を配るということはあまり行っていないようである。

以上①～③の3点に関しては、3. 本校教員による台湾視察 でも触れる。

2. 台湾と日本との英語教育の違い (台湾人学生からの視点とその話を聞いて)

なによりも学生たちが驚いていたのは、日本人学生たちの静かさであった。ここでいう静かさとは、『積極性のなさ』のことであるが、決して生徒たちが英語を学ぶ姿勢が悪いということではない。『発話への積極性のなさ (shyness)』に愕然としていた。3. 本校教員による台湾視察においても触れるが、台湾での英語の授業では、生徒たちが思い思いに発言する姿が見られた。そのため、1. 授業の内容 でも触れたような、アクティビティが中心となった授業が展開されることが多いのだと思う。

それでは、いったい何がこの shyness を引き起こすもととなるのか。もちろん国民性もあることと思う。先に述べたように、日本と台湾での英語に対する環境はとてもよく似ている。日常生活で英語を使うことはほとんどない。現地学習に行った生徒たちもよく「日本語のほうが通じた」と言って帰ってくることから伺い知れる。つまり観光という観点からみても、「英語を使わなければ…」という気構えはあまり無いようである。

ところが、台湾師範大学の引率教授陣と話してみると、皆驚くほど一様に英語を流暢に話す。また、今回のこの5人の台湾人学生たちは英語を使うことをまったく苦にしていない。日本の大学生で彼女たちぐらい英語を扱える学生はどれほどいるのだろうか？この違いは一体どこから来るのか？

学生に発話能力について聞いてみると意外な答えが返ってきた。

“Many children go to cram school for English.”

“cram school”つまり『塾』に行っている、というのだ。塾ならば日本でも多くの高校生が通っている。しかしそこで英会話ができるようになるわけではない。その辺りの事情を聞いてみると、実は彼女たちが言っていたのは『英会話学校』のようなものであるようだった。要約すると以下ようになる。

- ・台湾には二種類の塾がある。一つは、英会話の塾であり、もう一つは進学塾。
- ・幼いころから、子供たちは英会話の塾に通い始める。
- ・台湾の英会話塾は、英語を母国語とする人たちのみが授業を行い、徹底的に会話表現を学ぶ。また塾内では、いかなる会話も英語で行われる。

日本にも、英会話学校や子ども用の英語教室は存在するが、それとは比較にならないほど台湾の英会話学校は大きく、また教えている内容もずっと高度であるように感じられた。また、そこで英語名を与えられることが多いようであった。

そのような英会話塾では、アクティビティを扱うことが多いことも、発話の積極性につながっているように思う。

3. 学生を受け入れて

このプログラムは先に述べたように金沢大学と台湾師範大学の交流プログラムであり、本校としては、金沢大学に協力という形で参加したのであるが、こちら側としても大変得るものが大きかった。やはり、彼女たちや台湾師範大学の教授方との話し合いの中で、もっと生徒の **Motivation** を高める必要があることを痛感した。**Motivation** が低いという語弊があるが、やはり積極性、特に発話への積極性に関しては、まだまだ低いのが現状である。そのために、ゲームなどを随時取り入れていく、特に必ず確認をしなければいけない『単語』においてゲーム等を用いることは大変参考になった。そしてそのゲームもまた発話を促すものでなくてはならないと思った。しかしまた「授業が楽しく、時間がすぐ過ぎていく活発な授業だな」という感覚を受けつつも、もっと内容を見ることもあってしかるべきだ、という考えももった。

5人の台湾人学生たちは、強行スケジュールの中、持ち前のバイタリティーと明るさとそして優れた英語力とで、すばらしい授業を展開してくれた。それらは生徒たちだけでなく、本校教諭にとっても大変勉強になった。このプロジェクト（日本版）が成功したのは紛れもなく彼女たちの努力によるものであり、大変感謝している。

